



松前志摩守様落城御領内江立退候一件  
(青森県史編さん資料より)

今年の夏、弘前市茂森の長勝寺で行なわれていた地下の遺構調査により、偶然、ひとつの墓所の遺構が発見されたことが地元の新開各紙に掲載された。

この遺構は非常に良く構造等をとどめ、副葬品も良好な保存状態のまま発見されたが、棺が納められていたべき場所は空となっており、遺骸はいずれか別の場

所に改葬されたと推定された。そのため、ここに眠っていた人物を特定する直接的な資料は存在していないのだが、墓所の構造や文献等の記録から、松前藩13代藩主、松前徳広の墓所であつたとみられている。

さて、津軽海峡の向こう側、松前藩の藩主であつた彼が、なぜ一時的にせよ弘前に埋葬されることになっ

たのかというと、幕末維新の動乱がその元凶なのである。

1868(明治元)年10月、春から続いていた戊辰戦争の激戦が新政府側の勝利で終結したその矢先、新政府の蝦夷地支配の拠点であつた箱館が、榎本武揚が率いる旧幕府軍に襲撃された。箱館を準備していた

新政府側諸藩の部隊は所々

旧幕府軍の戦力は松前藩一藩で対抗するにはあまりに強大であり、同藩は弘前

藩などに援軍を要請しつつ防衛戦を続けたが、11月5日には松前城、続く15日には新たな藩庁として建築中だった館城と日本海側の拠点である江差が陥落して

主要拠点が相次いで陥落し、蝦夷地全体の失陥は免

## 動乱に翻弄された殿様

### 松前徳広

#### 石塚雄士

(県民生活文化課)

県史編さんグループ

主徳広とその家族一行は、11月19日に江差の北、熊石村関内から船で落ち延びることとした。

一行は難航の末、

の戦場で敗北し、10月25日には箱館府知事の清水谷公考が守備隊の残兵とともに青森へと脱出したため、箱館は旧幕府軍の手中に落ちることとなった。

そして、蝦夷地での独立を目指す旧幕府軍は、箱館陥落後の次の目標を新政府側に立っていた松前藩と

し、10月28日から同藩への攻撃を開始した。

ぎ行なったが、重い病状を氣遣いながら26日に弘前葉王院に落ち着いたのもつかの間、徳広は咯血を繰り返した末、29日に逝去したのである。

その遺体は弘前藩によって長勝寺に埋葬されたが、1869(明治2)年5月に新政府軍が松前藩を回復したため、翌年には松前藩菩提寺である法幢寺へと改葬されることとなる。

徳広は記録では仮埋葬だったとされているが、今回出土した墓所は、以前発掘された弘前藩世子、津軽承祜の墓所と同様の、大名の墓所にふさわしい構造として作られている。明治維

21日夜に弘前藩領平館に漂着したが、厳冬の津軽海峡を横断するという苦難の間に、船内では前藩主の幼い娘が命を落としていた。さらにこの航海は、以前から肺結核で苦しんでいた徳広の病状を決定的に悪化させたのだった。

徳広一行の到着を驚きとともに迎えた弘前藩では、城下までの護送の手配を急

新の大混乱の中、藩政の様々な面で危機的状況を呈していた弘前藩だったが、度重なる援軍要請に応えられなかった後ろめたさもあつたにせよ、無念の涙を呑んで客死することとなった隣藩の藩主に深い同情を寄せ、礼を尽くして埋葬したものと見えよう。